

仮^{かり}屋之内にぞ歸りけり

付記

資料の閲覧、翻刻に際して御高配を賜りました宮崎県立図書館に、厚く御礼申し上げます。

〔平成十二年十一月三十日 受理〕

郎にとゞまりたり 頼朝大きに褒美し給ふなり

曾我兄弟工藤を追懸る事

斯て 曾我兄弟は 六月十一日より 富士野、狩場に出て 列卒

の内に立交り 昼の内終日相伺と言へども 祐経兼て用心稠敷 朝

より暮まで 御大将之御馬之前後を不離居故に 兄弟相伺事不叶

また 夜に入ば 工藤が家人ども 内仮屋之添番にかはり 四方を

守り 割判無之人は不通 是非に不及 十八日迄過けり 然る所

彼之大猪 仁田四郎が働き 騒ぎ依之 四方八面 勢子皆ほどけて

弓矢 鎧 太刀持て 彼の猪に相向ふ 御大将の前後之騎馬も皆

御下知に依て 諸方の獸を追立る 此節 工藤祐経も片手矢励み進

み出て かの大猪のなけれど 妻鹿式正を追かけて 竹笠を傾け

金の行簾 萌黄の狩衣 隠れも更にあ「ら」ず 十郎目早く見付て

如何に五郎 鹿社来れ 五月雨の雨日の鹿の妻乞は 我乞ふ鹿こそ

出来れ 心得たかやと 兄弟は 瘦馬を富士の裾野に横平に駆けた

りけり 工藤早くも見付 南無三宝 また社 曾我兄弟ぞ 富士野、

根方を横切に馬を馳返す 十郎は 己天命 不可逃と 瘦たる馬に

強く鎧を合 手綱をくれて鞭を打 元来逞し馬なれ共 常に飼葉も

ろく／＼に不飼 今迄も絶兼たるを 大兵の十郎が急に急いて乗

程に 余り乗る人にか急かれて 此馬躓きて 前膝折て伏たり 十

郎は真つ逆に木の根之上に落たり 今七八反にて追付所 近比以残

念也 五郎見て驚き 馬より飛下り 薬を参らせ 高柄杓にて清水

を汲みて 漸氣を付る 天道の助にや 身に痛はなかりけり 兄弟

立上り 苦笑して 跡は泪を流し 扱口惜や 一度ならず式度なら

ず 工藤めを逃 果報強き敵の運命 然ども 終には討べきものを

と 歯がみをなし 残念ながらも 又大勢の勢子の内に入 其日も

に怒り 山の崩るゝが如くに 大勢ひ列卒を駈立る 弱き弓は矢も
 不立 究竟の精兵の射た矢を数百本身に掛けて 鼻息は雷の如く
 左右の牙を開きて 人を駈飛すに 五間拾間程は撥ねらるゝ 弱き
 「は」 死す 強きは手負と成る 諸士共まで皆手負と成り 爰に
 竹の下 源八兵衛近寄て突んとするを 腰の番を牙にかけて投げた
 り 土屋が甥に 土屋八郎も尻皮をかけられ 尻居伏す 四方より
 勢子取巻故へに 猪撥ね猛り 頼朝公御馬之前の方多走行く 時に
 仁田四郎忠常 生年四拾六歳 壮年の男 関東に並なき力量なり
 彼の景光が最期の詞に い□もあり 兼て覚悟は極たり 横合より
 太刀抜かざし 差留んとする 時に此猪 左の牙を差向て 内股之
 間を潜り懸廻るに 尻皮に牙かゝりて 一振ふつて撥ねたるに 牙
 に尻皮かゝりて 仁田はふらり／＼引ずられ 式三間走り あわや
 仁田は微塵に成るべきと見る処に ひらりと起直りて 猪の背に乗

りたり 牙は尻皮にかゝり 猪は思ふ様にならず 此故 怒り猛り
 けるを 刀を胸中に突通し 拳もくだけよと柄を握り 一大事に乗
 たり 猪は大きに猛りて 岩巖 谷壁 谷崩 木の根 草原走れ共
 仁田が尻皮牙にかゝり 胸中突れたり 仁田を岩にすり付んと色々
 に働く 忠常は荒馬乗り之達人なり 左右の足にて引挟みて 一時
 ばかり乗たりけり 猪は次第／＼に弱付 終には足を振り倒れたり
 仁田飛降り 其儘太刀を抜 三太刀まで差通し 留てけり 大牛の
 如き古猪也 十二足半の猪也 前代にも後代にも 八足の猪だに無
 之に げにや大層成る働き 御大将頼朝公の御前に引来れり 其節
 人足拾六人にて荷之 無限重きなり 世に是を山の神と言ふも断也
 富士は靈山にて 裾野は南を受 暖氣の所に住せて 心能幾年を経
 たるも知ざる猪なり 斯様の獣を仕留たる時は列祭無之 万一仕損
 じたる時は 大に祟りなすものなり 先 今日之狩場之働 仁田四

馬すくみて 自由に不働 不思議なり 馬より拔群^{はつぐん}におふま、馬武者を飛越へく 駈廻り 歩行立之列卒七八十人程は駈殺さる、

然る所に工藤左衛門 庄司景光 当年七旬に余り 弓は関東一之目

□之手練也 景光可射留也とて 馬を三角に馳せ違ふて 一之矢を

射たるに はるかに遠□□して 射留外^{はう}したり 景光安からず思ひ

て乗懸 二之矢 三矢迄射損じたり 鹿は元之山中に駈入たり 此

時 庄司景光弓を投捨 馬を留て感じたる 景光社 拾壺才より以

来 狩場を好み 今七旬に及 少しの目当ものを射損じたる事はな

し 然るに 今如斯は不審なり 其上 我心忙然たり □定山の神

の乗り給へるに疑ひなし 然らば景光が命も限有らん 後日に 人々

思ひ合て 死にたる其事評判有り 翌十八日には狩もなく 既に還

御可有哉と仰□有りしかども 是程にも繕ひたる事 何条 山の神

の咎も可有ぞ 已後 社を造立し奉らんとの事にて 十八日には御

狩も上にて 仁田四郎 常空穴を潜^くり 其内を拝み 其上に不二之 大宮を建立あり 山の神の靈驗明らかなり この夜 庄司^{工藤}景光 最

期の節に至り 聳なりたる仁田四郎を近付て 我口惜くも鹿を射損

じて命を終る 跡の事を頼み 七十三歳にして死にけり 此故に

仁田四郎心底に 大に怒り 古来より 古き獸を射損じるときは

□跡に祟^{たぐ}りなすぞや 神にもせよ仏にもせよ 獸の姿ならば人間に

及べきや 近比以奇怪之事なりと 心底に思へり 仁田は無双之早

業 大刀量の古兵也 明日にもまた此山に列卒立なれ また社出来

るべしと たとへ雷神にても仕留^とむ可申^も□ 覚悟して 命を極め

十八日之御狩に出けり 五月十八日 晴天に 朝横雲の明たり ま

た四方を狩立て 八面に立並んで 声を立 然る処に彼之呪る大鹿

高山^{なか}より十二足の大猪出来れり 此猪大に猛^{たけ}り 無空に駈立る す

わや大猪社出来れ 留よと 式拾万の列卒一時に呼^よわるぞ 此猪大

利輔 小山判官 結城判官 土肥次郎 榛谷四郎 工藤左衛門祐経

を始六十人 外飯家の面々に 長沼六郎 下河辺庄司 稲毛三郎

岡部古弥太 粕谷三郎 天野宮内 仁田四郎 土岐 穴戸 河村

市村始六拾人 并 若君^若十万君の御飯家の警固 声々揚^{やう}たり

建久四年五月十六日 列卒立有 卷詰 □□を叩^{たた}き 笛太鼓^{ふえ}にて

□□る 東方は足高山 西は富士川を限りて すへ^へは 百□卒

を立切り 色々の獣を谷々より追出して 平野の方へ^へ追出す 此中

に 頼朝公馬を立られ 四方を上覧あり 面々究竟の射手 直参之

面々式百騎 駒を乗り違て 犬追ひに射たりける 浮矢はひとつも

なかりけり 御曹子十万公の矢 鹿一疋当たりたり 頼朝悦^{よろこ}び給ひて

若年の奇特として 弓の師範愛甲の三郎 御褒美有時に 早^はや暮に及

たり 惣人数上り 飯家に入 其晩 御飯家酒宴にて 其夜 老躰

の齋院の次郎諫め申て 古来より山は山の神也 三宝荒神一躰にし

て 山の神と崇め 春は花を愛して佐保姫と申 秋は紅葉を愛して

龍田姫の明神 五月七日に田に祭り 田の神 十一月七日に祭りて

山の神崇む 皆同一躰にして 庚申の垂迹^{すだ}なり 富士は日本□之靈

山なり 山の神のなき事は不可有 是非 山の神祭り可有事なりと

古実を諫申に依て 俄に山の神 矢口祭り有けり 今 不二大宮の

上に山の神の宮有り 其社^ににて 矢口祭り 黒白赤の餅三宮を供^も

へて 奉祭て 其夜は静に御酒宴有り

仁田四郎大猪を留る事

翌五月十七日 また富士野を卷詰^結 狩廻居ル処に 富士野大宮之

方より 大鹿壹疋走り出 列卒雑人を駈飛す事 只電の如くなり

大勢ひの勢子^{せこ}卷詰^結て 大鹿也 射留よ 切留よと騒^{さわ}ぐ 四方は 西

より此大鹿を目当に相集る 南に式百騎 馬轡^こを取外^として追立るに

給へり 然^ばは 是源家重代の太刀 友切丸と申たる太刀也 是を参

する 本懷を達し給ふ後に 此太刀之儀に付 定て行実が所為と

鎌倉より咎給はんは覺悟の前也 此度之餞別には是にしかずとて賜^給

ひけり 兄弟 別当之志を感じ 悦勇事限りなし 別当 重ても申

は 相構へて兄弟心を慥に持 本懷を達し給へ 愚僧も今日より四

明王の法を修し 日護摩をたき 運を祈るべしとて 早や壇上を飾

らる、 日夕暮 兄弟暇申て立出る 別当門前迄送り 名残りを惜

る、 其夜は直に馳通しに馳て 駿河国浮島が宿に着にける 抑も

兄弟箱根登山の時 湯坂峠にて 姉^子の二宮太郎朝忠に逢たり 二

宮被申は 如何兄弟 珍しやと 詞を懸る 兄弟は さればとよ

我等此度之狩場見物参るにて候 何心なき様に申 二宮太郎打笑ひ

浪人のいわれざる事ながら 年若面々なれば尤之事也 富士野にて

諸事不自由にも候べし 我等之木屋に被参と 念頃に被申ける □

人聞て しからば一腹一生之姉^子簪にも 兼て曾て知せずと見へし

何□ 一筋之兄弟 無双之者也

頼朝富士野にて山神祭之事

斯て 頼朝公 富士野御旅館并に饗応は 北条四郎遠江守時政乞

申さる、 依て 時政先達て 富士野の神の野と言ふ平場に 御陣^陣

屋を造営し 南向に御殿を作れり 御寝所は別に六間 拾貳間□

侍所 御番所 諸用所 台所 侍所くしまりくの仮屋 埒矢

来迄幕打廻し奉 侍其外 諸大名之内仮家 外仮家立続き さも広

き神野も 寸地も更になかりける 頼朝公 既に富士野、仮家に入

御 諸大名并諸国之列卒 偏に湖之湧^わくが如也 げにや 果報日出

度鎌倉殿也 十五日には 御供内仮屋之面々 江間小四郎 上総介

千葉介 畠山次郎重忠^四 三浦別当義澄^常 和田左衛門義盛 大友刑部

抱に与^預り 且又 権現に日に七度之參詣 大願申たる社頭也り 御
暇乞申度社候へ共と 言ふ 祐成聞て 如何様にも 和^調殿被參ば
我も參べしと 道を急ぎ 湯本 檜木 猿滑^{すべ} 惡所難所の構ひなく
只一馬場に権現の御山に着てけり 抑 此箱根大権現は坂東随一之
靈場也 後は高山にそびへ 白雲を帯にし 前には湖水満々として
本地に文殊師理菩薩^{さつ} 一度歩行を運ぶ人は 永く業を解脱せんとの
誓願也 兩人は神前にて 此度本懷を達すべきとの大願を申 扱
別当の坊へ参り 行実阿梁梨立出 対面 悦び 種々饗応し 往を
語^{かた}り 泪を流し 時宗を見て 父河津殿に似給ふと被申ける 五郎
申けるは 某事は御心に背き 出家を不仕 御山を出奔して 今此^は
様に男に成は面目なく候 曾て世の交り羨み 如此之姿に相成り候
に非ず 唯父の敵を討 仇を報ずべきの心底に候得 今 御勘当を
も御免蒙り候はん 我々が最期も此度に限り候得ば 御姿を奉拝

冥途^迷之旅も安く仕んと歎き申ければ 別当行実感泪を流し 何しに
恨み可申 今に行実を忘れ給はず社悦び入候 我助力可申にも 不
及力 法師の役なれば 後世^せの事 或は最期の仏□など社可參すの
所なれども 我心入有 近頃不似合事なれども 兄弟に太刀一振づ、
錢別せんと 権現の宝蔵より 太刀二振を取出して 十郎^拾呼て 此
太刀 木曾の左馬頭義仲の重宝也 銘は微塵と名付 秘蔵なし 嫡
子清水冠者義隆に譲り給ふ 然処に 清水冠者 鎌倉殿に縁を結び
智となり給へり 以後 義仲誅討之節に 清水冠者滅亡可有の処
武運長久の為^{ため}に 権現に此太刀を奉納ありし この太刀を以 本懷
を達し 高名し給へと 十郎^拾に賜ひにけり 五郎には兵庫鎖^{くさり}と言ふ
太刀を參らす 此太刀は 源の頼光の御太刀也 保元平治の時
鞍馬に納りしを 義経が乞て差給ふ 鎌倉達て所望なれども 辞退
有 先 腰越より上京之節 一家和順之祈念として 当山^江へ寄進し

や 君臣上下忠誠をや 常之人にても 朋友の交り万端に付 仮初
にも不実なく 人の悪非を改ず。 正道賀路にする時は 友人 是に

信を以てむかふ 夫は天然と徳実重ねたる時は如斯なり 曾我兄弟

の家人 鬼王 団三郎 富田次郎三人之者共 富士野にて不死とも

忠節也 また兄弟の形見を持 老母へ届る斗りならば 老人にて事

の濟べきに 見捨て帰るなど言ふ 理も非ず 主従指□たる時 全

く意趣討也 是は 兄弟式人の仇敵に非ず 主従之忠節に奉仕する

也 海道筋之違ふ所を思へり 扱 第一之心人は大敵の事なれ共

若し討損じたる時は 敵之上に返り討に逢ふたる時は 誰有てまた

志を立て可報仇 人も無之故に 二人家来心を尽し 仇を可報との

事にて残りたり 死て後 富田次郎は老母に仕へ 一生浮身をゆだ

ね 鬼王 団三郎は高野山に登り 求食□□の僧と成り 兄弟の苦

提を弔ふ 今に曾我兄弟の石塔 高野山の石塔□之内参れば 左之

方中段にあり 曾我兄弟信実の人なれば 家人原もひとへに忠誠に
有けり

曾我兄弟箱根登山之事

十郎祐成 五郎時宗は 此度之狩場□には 老母之勸氣を赦され

誠に年来の本懐不過之 譜代之家従 綱代の鬼王 松原団三郎 富

田次郎三人 弓矢搔負 雑人六人召供して 雨具 兵粮取り持せ

瘦馬に跨りて立出る 哀れ 一所に主□も非ず 幕打せ 列卒立も

可有に 其身忍んで 畠山殿は目早やく見て 定て 兄弟 此度は

始終我手の勢ひ之内に可有と 本田 榛沢に下知を伝へて 必く

曾我兄弟に疎略すべからずとの事故に 心易く 富士野には有けり

左も無之時は 列卒改人列之時に 浪人なれば 組分からず 去程

に 五郎は祐成に向て申は 我幼少にして箱根に上り 師の坊の介

曾我根元評判大全 卷之十

本章

祐成 時宗 曾我出て 富士野に赴く^趣 時に五郎 箱根を出走之

節 権現老師に暇乞不申哀 此度登山申度よしを願う 十郎^拾聞て

貴殿之心に任すべしと同伴して 別当行実之方に伺公対面す 此節

旁に太刀を賜ふ^給 かくて 富士野の御殿は 北条時政饗応之す 諸

大名之仮家は面々の作り前也 仮家廻りの内堅固之番は 最初は畠

山次郎重忠壺人なりけるに 工藤奉願に依て 非番□して 工藤祐

経 愛甲三郎両人の家人共割かる、 是はひとへに 曾我兄弟の忍

ぶ程 心得思ふ故也

斯て 頼朝公 兼ての為下知 富士の山裏東北之方迄 狩立らる、

然処に 大きさは牛の如き猪壺正 相劣ざる猪一双 駈出たり 最

初の猪に諸人矢を射懸ると言へども 曾て当らず 此故に 馬にて

駈立んとするに 馬すくみて動かず 歩行立の諸侍 前後左右より

追取巻 初猪に懸て 人大勢ひにて 既に御幕の内に入らんとす

下河辺^部庄司 弓の達人故 矢を射懸れ共 不中 南の山腹に入たり

翌日また 相劣ざる猪を狩出す 大勢矢射懸れ共 曾て不中 怒て

雑兵三四拾人死亡せり 時に 仁田四郎忠常 小手装束 白狩の尻

草後様にはね 是非不及 仁田 猪に乗りて晴成勝負 四方列卒は

声を立 岩巖石を乗り廻り 終に猪は突当たり 此猪 拾壺足半ツ

ナヌキ有と言ふ 日本□なり 斯^か様の大猪あり 駿州甲州の百姓原

山神也と言 頼朝心に懸給ふ 学師斎院次郎申は 山神に非ず^と

申て 矢口祭りして 山神を祝ひ 此已後 弥 富士野、御狩に極

けり

凡 人信有^ば また人報之に信を以す 曾我兄弟は至て貞誠孝心

の人々にて 常信の厚き人なり 故に 人報^ずるに信^{しん}を以てす 況

へ罷出よ 十郎介藉すべしと呼はりたり 老母^{おふ}大きに驚き 十郎が

袖にすがり 祐成よ 御身は氣^きばし違ゑるや 現在の弟を討事有

我勘当之事は人には言^いず 千々の歎きの数々ぞや 今は勘当も不興

も許^{ゆる}し参らする 五郎に疾^とくく出給へと さらりと勘当相済たり

十郎も五郎も年来の悦不過之 兄弟打連 母の前に出にけり 誠に

此三年の辛勞 悦之泪袖を貫けり 老母心^{おふ}大きに和ぎ 流石に親也

時宗を近く呼んで 小児のごとくなでさすり 御身は心も荒く 大

力量と聞 如何にも身を安穩に持給へと事なり 今よりは 少し

も隔心不可有と 御盃を賜はる 五郎悦て 今日是如何成日ぞ 三

年の辛勞一時に晴 勘氣御免の嬉しさよと 涙^{なみだ}を流す 母は 河津

殿若盛りと見る様^{よう}の五郎也 今度 富士野に五郎も参り給ふとや

十郎を留れども承引せず よしや曾我殿も参らるれば 案^{あん}じも少し

は薄^{うす}からん 相構へて口論^{くろん}ばし給ふなと 濃紅梅^ひの練之單を五郎

に賜はる 時宗悦戴て 最期の肌着にすべきと 涙^{なみだ}も悦びも日頃の

本懷也 此時 酒も過 親子無防 兄弟は十郎が宿に帰りて 悦び

旁々 其用意無滞相済と言へども かつくの有様にて 瘦た馬に

剥^はげ鞍置 弓矢搔負 召具したる面々は 鬼王 団三郎 富田次郎

普代三郎等也 相伝之郎等三人 雑人六人 兵糧 馬草^{くさ} 狩場の用

意相調 さしもに連理^{れんり}深^{ふか}り「し」虎御前に 此度は寄斗も知せず

此四五日は右用意にて 遠^{とほ}ざかりしを其儘に 近比心強き十郎也

兄弟は既に装束相済て 鎌倉殿^とも御立有 態と曾我太郎殿 二の宮

太郎の人数の中に不交 畠山殿の列卒之内に入 某^{それ}と見知り見知^しら

れ 互^{あひ}の挨拶^{あいさつ}はなけれ共 心底には相通じて打立ける 其日出立之

時 是かや老母の名残 今生の見終り 二人狩装束にて 老母の前

へ出て暇乞 老母も やがて帰り給へと千歳を祝ひて 門出せり

併 是かや死出の旅立也

王丸とて不出来なき子を持つるが、母が命に背き、僧にも不成、大悪人の男めは、疾く勘当申たり、貴殿の外、母が衣服を乞べき子なしとの給ふ。十郎泪にむせびて、扱御心強き御仰にて候。その箱王丸が事にて候。今は勘氣をも免されて、御前へも召出されよかし弓矢の道、若哉、狩場流矢にても死たれば、親に勘当せられたる人は、仏神にも憎れ、まげて此度、勘氣御免の上にて召具し申度と、歎き被申ける。老母聞給へて、その五郎事に候哉。此男めが事は思ひ不寄なりと、今更の立腹にて、中／＼免許の沙汰はなかりける。十郎も、今は心に案じ、煩ひたる有様也。時、五郎時宗は障子の陰より如何。十郎殿、世には親の勘当もある習ひなれ共、かく迄御憎みを請取。五郎が運命こそ情なけれ、父上河津殿には三歳にて別れ、漸々人と成、人ヶ間舗成りて後、三年以来、母の勘氣蒙、世になし者の上にまた、日陰者に成、往来の人にも隠れ忍ぶは、老人之母に勘当

請たる時宗よと、後指さ、れんと、日の光、月の光りをも身をよけて通れかしと、憂き三年の苦勞に、千々の命を縮めし也、また世の中に出家して居る人もある。五郎に限り左様にの給ふは、父の菩提の為ならん、さらば、如何にも御菩提の道をも弔ひ奉ん、よしや今暫くの間男にて、又年を過ば、などか出家も仕ざるべきや、とかく恩愛にも放れたる時宗也、祐成殿よ、手討にして、母上の御憤りを散じ給へ、また、兼而の思ふ願ひは、貴方老人の力にても、時宗死して影身に添て守り可申、疾く／＼と、泪に袖をつらぬけり、十郎は如何思ひけん、大の眼を見開き、つつと立ちあがり、げにや、世の中に勘当請たる人も多く見たり、汝が如きはあらず、世に在て生甲斐なし、死したるこそ増しならぬ、世間のはかりあれば、社、流石に殺しもし給はざらん、いで、時宗、首打て、母上の御憤りを可散と、荒らかに障子をはたと明、太刀の柄に手を懸、五郎、それ

じと 兄弟談じて 鬼王 団三郎にもかくと告たりければ 兼て

三原 那須野、留守に 近年調度の諸道具衣類 悉く売代なして

漸 其用意もかなりに出来たり 五郎一入に悦て 此度は生んと思

ふに社 死を極め 思ふ敵老人は 一矢に射落して 討死すべし間

舩んは 犬房丸をば逃しはせじ 然共 十郎殿 聞給へ 日比申た

り 時宗が難儀 妄執の障りとも可成は 老母の勘気社難儀なれ

既に此世の名残なれば 此近年の間の憂き苦勞 只一言に散ずべき

誰彼を以申共 色々のあや出来ては はかどるまじ 御狩の沙汰も

近日あり 何角の用意 冥途の土産 不過之条 十郎殿 平に詫び

て給へと申ける 十郎も されば 我も左様に思ひ候 いざさせ給

へと 五郎を召具して 老母の方へ参り 先 五郎は障子の外に隠

し置て 十郎 母の前におゐて歎き申けるは 此度 鎌倉殿 富士

野に御狩の候 前代未聞の見物と 大勢ひ参候旨 幸ひに太郎殿に

も供奉の事也 我々も忍びて見物可仕と存候 依て 帷子を一重給

り 狩場の晴に仕度しぞと しをくと歎きければ 老母聞給ひて

しかゝの思ひは 母立て留るも有まじけれ共 同くは思ひ留り給

へかし 諸国の寄合なれば 口論も有惣べし 御身の父河津殿も

狩場にて失給ふ 旁 狩場ほど憂きものはなしと ひたすら留給へ

ども 十郎は 喧嘩口論は世にありて威勢負ふ故也 世なき我々

誰と口論可仕哉 まげて此度は参度と願申故 母の申さるゝは 達

て留るは 衣服を惜しむと思はれんと 調台に入て 薄紅梅の練

の一重を出して 十郎に賜ふ 十郎心底には泪を含み 必最期には

此小袖肌に着るべしと 悦び 泪にて拝戴き 重ねて申けるは 此度

は時宗も召具申度 時宗にも一重給はり候様にと願被申たり 老母

聞給へて 時宗とは誰が事ぞ 和殿外に子は不持 二之宮に嫁せし

姉 また 律師丸は越後にて禪師坊とて 能き出家になりたり 箱

難叶 よし／＼ 年来の太刀業此時と 外目よりは鹿を追ふとぞ見

ゆらん 兄弟二人 二つ連れたる唐獅子のごとく 跡なり先になり

追懸行 工藤左衛門早くも見付 兼て心につけ 用心するゆへに

見るより早く手綱を繰つて 広の横に御幕の方に馳過る 馬は飼に

飼うたる名馬の駿足 風に木の葉の放如く 一散に駈飛□ □郎は

草鞋の紐切れて あさましき歩行裸足 弥猛には思ふといへども

叶はゞ社 兎哉角するうちに 大勢ひの人 馳込入たり 跡方もな

く見へずなりけり 兄弟大さに歎息して 泪流して茫然として立居

たり 五郎心を取直し 十郎殿 力を落し給ふな 是限りにもあら

じ 末長き狩場のうちに 終には廻り逢ふべき也 是非なく兄弟は

相連れ立て片脇に社忍けり 不便成有形也 去ほどに 此節の御狩

も相済て 將軍も一先鎌倉へ帰り 重て可被催と 鎌倉に帰らるゝ

兄弟の面々も帰り足にも 泊々宿々に心を付て狙へども 工藤は用

心厳しくして 終に討得ず 兄弟は曾我の里へ帰りけり

頼朝公富士野、御狩触并曾我時宗老母勘気赦免之事

建久四年五月二日 頼朝被仰出に 近日富士野 藍沢の夏狩可有

との下知 甲斐 駿河領分面々は 百姓迄不残 山野を狩立る列

卒に可出との事ゆへ 両国には 平場に数万の人数用意頻り也 鎌

倉在番の諸大名は勿論 諸国大名 晴成用意 爰に曾我十郎は時宗

を近付て 我々年来の本望を達するは此時有 此度報ずんば 其期

は不可有 三原野にては歩行立なれば 甲斐なき事なり また此度

富士野は程近かりき 馬 鞍 飼葉等の用意も 兼て鬼王 団三郎

が覚悟したり 又 曾我太郎殿 二の宮も御供たり 同宿申さば社

御難もあるべけれ 人不知 狩場の近辺にイ 日夜を過して 瘦馬

に跨とぞ思ふ 仇を 工藤は何万人之うちにても 中々逃しはすま

かと伺へども 早廿七日の夜も明渡る また大勢ひに打紛れて 彼
 の方此方と尋迷ふぞ不便也 それより 泊々宿々は 上州松枝 或
 は碓井峠^{へうすみ}を過 所に心は配れども 工藤には逢ざりける 四月二日
 信州三原野に着給ふ^王 此度 右大将家の御馬の前後に 精兵の射手
 廿騎を撰み 畠山重忠 和田義盛 小山判官 江間小次郎 仁田四
 郎 榛谷四郎 土屋義清 佐々木三郎盛綱 結城七郎影光 千葉太
 郎 佐原拾郎 下河辺庄司行平 里見太郎 小笠原次郎 諏訪大夫
 洪谷 望月 天野 東野 彼等は 養由基^{養西}にも劣ざるほどの精兵
 其外の諸大名 打込に いやが上に備へを配りて 既に三原野に被
 懸 然るに 此野は 古来より殺生制禁^製の子細あり 諏訪大明神の
 祭礼 鹿 猪 狸 雉子をととりて 上下明神へ供御^備に供へ来れり
 げにや 神慮の咎めにや 俄に大雨 雷電 風吹来りて 中々人立
 不相叶 此ゆへに 下野国那須野を狩らせらる歩行列卒の棟梁には

小山佐衛門朝政^光 宇津宮弥三郎 那須太郎光資三人也 頼朝の下知
 は 近衛院の御字 久寿二年 此野、狐を狩時 三浦介兩人に射ら
 せられたり 其跡を尋るべき也とて 三浦介義澄 上総介広綱兩人
 に仰て 東西に別れて 那須野を一篇に狩り立る 大鹿 猪 兎
 雉子夥しく出て 若殿原手柄を顕す げにや 平家の八島の崩もか
 くやと 分捕 高名 思ひくなり 然る所に 野末方より 鹿社
 三頭出来る 祐経は□地單 狩衣に 金欄^{らん}の行膝^{むかばき} 袴に 鞆^かを搔き
 負ひて 竹笠打着て 鹿毛成馬に打乗て 色白き究竟の武者 鹿を
 目当に馳来る 曾我兄「弟」の人々 其節は三浦介が列卒のうちに
 居りたりしに 五郎目早く見付けて 十郎殿く あれく御覽ぜ
 よ 鹿走り出来れと 兄弟顔を見合てにつこと打笑ひ 天の与ふる
 所也 一矢にとは思へども 歩行立の雑人 歩卒の内なれば 弓矢
 は不持 走り付んと思ふに 歩行立也 扱も口惜哉とは思へども

不相叶時は 富士野、狩場を徘徊し 思儘になすべきぞや 残し置

兄弟 雑人二人に雨具 兵糧を被持て歩行 若党のごとく出立て

畠山殿の列卒之内に入 打立けり 重忠目早く見付給ひて 家長に

内意申付られし 本田次郎 榛沢三郎^{ハシヅ} 朝夕に心を付 曾て見知ら

ざる躰にして 此列卒の内にも 利発にて氣に入たる由 大将重忠

之御仰也と 念比に家人の如く また或時は 客人のごとく同伴し

て 折々毎の心配り 畠山殿の情之誠 殊勝千万なり 是ひとへに

天道の御恵みなり 兄弟心を一つにして 工藤を討んと 朝夕狙ひ

けり

頼朝入間川那須野御狩曾我兄弟工藤を追懸る事

御大将頼朝公は 建久四年三月廿五日 鎌倉出立 狩場に出給ふ^出

鎌倉の留守には 北条時政一家を残され 御供には畠山 和田 三

浦 千葉 宇津宮 小山 結城 土肥 岡崎 土屋 江間 下河辺

工藤 武田 小笠原 辺見 佐竹 上総之介 其外の諸大名 在鎌

倉の面々 惣て 日本に名の有る諸大名不残集り 列卒貳拾四万余

人なり 草も木も野も山も 人ならずと云ふ所はなし 誠に果報目

出度頼朝也 既に武蔵国入間川に着給ふ^着 此所にて 入間野、追鳥

狩を上覧有 諸万人の列卒 諸方の山々を狩り立^か 入間野に追

出 雉子^{ヘキツ} 狐^こ 狸^ね 狼^を 熊^{くま} 猪^{いのしし}の数を尽して 面々射留 組留 取々

様々の得物也^物 曾我兄弟は心に懸る事あれば 雉子一羽にても留^{とど}ば

社 只工藤を付出さんと思へども 頼朝公の切り人にて 御前不去

の出頭にてありけるほどに 曾て見合もせず 其日は大倉 小玉^{こたま}の

宿に止宿なり 狩場の御前警衛^{へいゐ}に畠山次郎重忠当役 又 列卒頭な

れば 惣人数の改めは本田 榛沢^{はしづ}が吟味するゆへに 少しは心も安

堵也 其夜中は所々方々に徘徊して 立休^{たやす}らいて 若時節のあらん

渡り 獣多きと聞及たり 先信州三原野 野州那須野を狩りして

其後 富士の藍沢を巻狩すべき也 鎌倉在番の武士は勿論 諸国の

武士に触廻す 此時に 曾我兄弟は 誠に天の与ゆる処也 此度列

卒□入 年比本懐を可達と□を考見るに 先 信州三原迄は

三日半の行程也 然ば 路錢 馬鞍 狩装束之用意 過分の雑用也

常にさへ 其日一日を暮しかねたる曾我兄弟 心は弥猛に思へども

いかなく 少も貯無之身の上也 是にては 兄弟 鬼王 団三郎

四人 額を集て 色々と相談して 不相調 扱も口惜事かな かく

まで困窮する事もある事か 世になき人も数多見るに 我々ごとき

は無之 是はまた 武運之尽果てたる事哉 よしや 常々入魂なり

畠山殿にや合力を可頼 また倍 三浦をや可頼 いやく 是まで

義理を立て 養父の辛勞にもさまで不成 常の養ひだに 随分可申

様にする 腹押切ても無心は言まじと 思ひ詰て 此相談不埒明

時に 五郎言ふは 十郎殿は勞□□千万なれ 皆人なみに 弓矢

搔負 鬼王 団三郎に下人七八人も召具して 飼葉兵糧迄持せんと

思ふ故 色くの辛勞 □談もあれ 兄弟只二人 恥を忍ぶにも非

ず 雨具持せたる下人一兩人召供して 太刀斗にて 土肥 三浦の

列卒のうちに入交り 忍て本懐を可達也 いざくと 言ふに 其

兄弟斗の用意 前後共々の雑用とて一錢もなかりけり 此時に 五

郎も勇氣くじけ 落涙して 兎哉角相談する所に 大磯の虎御前よ

り使あり 兄弟の衆 信州狩場見物の沙汰聞 定めて御不自由成べ

しと 雨具 小道具 兵糧金の貯等 いやしからずして差越たり

兄弟悦び不浅 中に五郎大きに歛 扱重宝成虎御前 十郎殿 能々

御礼被申上よ 悦事不浅 かくて 鬼王 団三郎は留守に残り 万

端に心を付 土肥殿宛行を増して□ 又 老母に願ひ 重ての用意

の馬具 雑用の用意□すき也 此度本望達すれば 一領の事 また

貴賤上下共に 我樂みをなさんと物の命を取るは如何にぞや 仏法
 に言ふ斗に非ず 大きに不仁の沙汰也 合戦のならし 人数の扱ひ
 手練は 殺生せず共成なん 將軍の好み給へば 天下悉く争ひ好
 下賤の言ふには 食類に成鳥類なりといへども よしや 四足の生
 類喰ずとも 一生は過なん 偏に 我樂みとして 下節の者の口に
 一年に五六度喰ず共立なん 惣じて殺生は 仁愛薄き故也 また
 如何成を 仁政と言ふべきや 富士の卷狩の雑用を以て 日本國中
 の年貢を許されば 如何斗万民の悦びならん 日本の諸民と相同じ
 く 樂恵の理なるべし 太閤秀吉の高麗陣六年 雑用□以て 日本
 の万民を救ひ給は如何 是軍学の要用とする也 国の根元は とか
 く人を善樂の間に置く 此悦びのうちに 四海に起べき逆賊もなき
 ものも 頼朝の不足 然るに 天下を治め給ふは 勿論 源家の正
 流にして 筋道もあるべき也 平家の逆惡 万民困窮する 此断が

幸と成 平家を可去人は兵衛之佐殿也と 天下こそつて頼朝に従ふ
 尤 大將の器量はあれども 仁愛無之故に 父子三代 僅かに四拾
 三年にして亡 信長 秀吉 一代にて亡 只仁政を似て 永く相統
 すべし 併 此卷狩は日本希有の大事なり

頼朝公信州御狩并曾我兄弟工藤を狙事

將軍頼朝公は居ながら武勇逞敷 終に 木曾 平家を討亡し 奥
 羽までも治り 天下一時に安樂を諷ふ 頼朝公仰は 我天道の助有
 て 戦場の苦しみもなく 平防す 凡 戦調練ならば 唯狩場に有
 また 治国の武士の働き 弓勢甚哮るも 若殿原の励みに成り ま
 た 頼朝が心をも慰めん 我以前流人にて伊豆にありし時 伊東が
 奥野の狩倉 赤澤山の遊興 其節 なんばう羨しかりし 我近年聞
 所 下野の国那須野 信州三原野 武藏野は勝れて 広野深山に相

經 鹿三頭を追懸て来 曾我兄弟 天の与ふなる所と思ひ 追ひ懸

る 乍去 工藤は馬上なり 兄弟は步行立 弓矢は不持 終に逃の

びたり かくて 右大将家帰鎌倉 曾我兄弟も曾我の里に帰りけり

頼朝公 重ねて被仰出は 当五月 富士野 藍沢の夏狩可有との用

意頻也 曾我兄弟 此度 是非に本懷を可達 しかれば 生前の暇

乞 老母の勘氣 可被免の願 五郎頻りに訴訟するに 老母承引せ

ず 時宗は大ひに悲しみ 障子を隔 祐成に申条不便也 十郎既に

五郎を討て捨てんとす 時に老母大ひに驚き 走り出留て 終に勘

氣赦免あり 下着小袖 兄弟ともに給はり 一夜は母の前にて酒宴

して 日比念願 鬱氣を晴して 兄弟は心よく 曾我の里を出にけ

り

兵書に曰 喰甚喰者は損なわず 其の器蔭其木者は不折其枝 げ

にや 此語のごとくなり 朝夕喰する碗を破り損ずる人はなし ま

た 夏の日の暑きを凌ぎ 或は俄夕立 時雨をよけたる木の枝を

退く時に折人はあらし 飯の縁に伴る、 況や 父母の大恩をや

末世末代にも 曾我兄弟の至孝深節は可感なり 五郎は心一筋故に

母の勘氣を恐れて慎み重く請たり 甚可譽之第一なり 此度は 父

の敵を討 死に向かふ事なれば 大概之事は打捨置べし 老母の勘

当は跡にて悔み給へ杯と言ふべき之所 兄弟は 唯深く五郎が勘当

の事を歎く また十郎好色に不恙は 大磯の虎御前に露斗も知らさ

ず 彼是 兄弟至孝全く他念なし 正道律義の人なり

頼朝公御狩之評之事

頼朝公は 雖名將 仁愛治平の将には非ず 勿論 武家惣追捕使

始てなり 制御の掟残所なく 今 天下の式目相残といへども 不

仁の沙汰多し また 軍之理を曰 富士の巻狩 是何事ぞや 都て

翻刻『曾我根元評判大全』

卷之九、卷之十

後藤多津子

凡例

本文は底本通りに翻刻することを主眼としたが、読解の便をはかつて次の処置を施した。

- 1 句読点に相当するところは一字あきとした。
- 2 仮名は現行の字体に統一した。
- 3 片仮名「ハ」「ミ」「ニ」は捨仮名の場合を除いて平仮名扱いとした。
- 4 仮名の清濁については、底本にない濁点を適宜補い、補った文字の右に・を付した。
- 5 漢字は通行字体を用いたが、慣用字は底本のままとした。
- 6 反復記号は底本のままとした。
- 7 明白な誤り及びわかりにくい宛て字は適宜改め、底本の文字を振り仮名の位置に残した。
- 8 底本に振り仮名がある場合は、その振り仮名にへゝを付して7と区別した。
- 9 脱字は「」内に補った。
- 10 損傷等により判読不能の部分は、字数のわかる場合には字数分の□で、字数のわからない場合には□で示した。

翻刻

曾我根元評判大全 卷之九

本章

建久四年三月十五日 右大将頼朝公 信州三原 野州那須野を狩
 せて 御覧可有と 鎌倉中を被触 曾我兄弟聞て 此度本懷を可達
 と思ひ立所に 貧窮にして用意不相調 不及是非 狩装束 馬をも
 止めて 歩行立 中間のごとく 畠山重忠の列卒のうちに入 那須
 野も過て 駿州に狩し給ふ 右大将家御馬の前に 騎馬の勝た精兵
 を選みて 廿騎を立られ 諸々を狩 得物多し 然る所に 工藤祐